

# 名詞編入複合形容詞について

——統語論と形態論のインターフェイス\*——

有 村 兼 彬

英語には「名詞＋形容詞」の形式を持つ複合形容詞が存在する。この場合、名詞が形容詞に関して一定の論理的関係を持つが、本稿においてはこの関係は統語論で作用すると思われる操作が働いてできたものとする。例えば、eye-catching という複合形容詞において、eye が catching の基体である catch の目的語の働きをすることは自明のことのように思われる。この関係は、何らかの規則によって捉えられなければならないが、本稿においては、英語の基底の語の配列は「主要部—補部」であるという前提に立って (Kayne (1994)), この場合も catch-eye がもともとの配列であるとする。そして、次の段階で eye が catch に付加 (移動) することによって、最終的な形態である eye-catching が生じると考える。この場合 eye という主要部が移動するという点において、その移動は「主要部移動」(head movement) であって、eye は catch という投射に編入されたのであるから、本稿では eye-catching などのような形容詞を「名詞編入複合形容詞名」(Noun Incorporated Complex Adjective) と呼ぶことにする。

英語における名詞編入複合形容詞は、第2要素が現在分詞形であるものの他に、family-oriented のようにそれが過去分詞であるものと species-specific のように純粋な形容詞であるものがある。また、この種の複合形容詞の場合、第1要素の名詞と第2要素の形容詞は形容詞に内在する前置詞を介して関係付けられる<sup>1)</sup>。また、第2要素が現在分詞形の場合は、上述のように第1要素が現在分詞の基体となる動詞の目的語ではなくて動詞に内在する前置詞を介して関係付けられることもある。

以下、第1節においては名詞編入複合形容詞名の類型を調べ、それぞれの特徴を検討する。第2節においては、第1要素が現在分詞に関して目的語の関係をもつ場合を検討し、その派生について検討し、統語論において想定された規則や原理・原則、具体的には Kayne (1994) の反対称性 (anti-symmetry) の原理、ひいては非対称的 c 統御などの構造をもとにした原理

が形態論でも有効であることを示す。更に第3節では、第2要素が過去分詞・形容詞である場合を検討する。この場合、第1要素と第2要素とが前置詞を介して関連付けられる。例えば、family-oriented (program) のように、前置詞を用いた後位修飾構造 (the program that is) *related to family* に対応し、前置詞が過去分詞形容詞の選択特性に関わっている場合と、ankle-deep のように deep to the ankle に対応するが形容詞と前置詞の関係が薄く、ほぼ付加詞的な関係としか思えない場合がある。第4節では第1要素と第2要素との間に緊密な関係が見られない場合について検討する。更に第5節においては、編入された名詞の意味論的、統語論的特徴について考える。更に、Biber et al. (1999) で分類属格 (classifying genitive) と呼ばれているものとの類似性を検討し、名詞編入複合形容詞名の語順的特徴を検討する。第6節では、英語の名詞編入複合形容詞と日本語の関係節の共通性を指摘し、日本語研究で指摘された認可条件が英語の名詞編入複合形容詞の分析においても有効であることを示す。第7節においては、残された問題を考える。

## 1. 名詞編入複合形容詞名の類型

まず、名詞編入複合形容詞における第1要素の名詞は、第2要素と複雑な関係を有している。第2要素の形態を次の3つのケースに分けて考える。

### 1.1 第2要素が現在分詞形である場合。

[A] 第2要素の基体となる動詞が他動詞である場合  
→ 「動詞＋目的語」の関係。

breathhtaking, blood-boosting/-testing, confidence-boosting, eye-catching, fact-finding, God-fearing, hair-raising, fault-finding, habit-forming, heart-breaking, life-giving, life-prolonging, lip-sucking<sup>2)</sup>, man-eating, nerve-wracking, peace-keeping, painstaking, record-breaking, self-defeating, self-justifying, time-consuming, time-saving

Selkirk (1982) では tree-eating と tree-devouring の違いを主要部とその項構造という点から説明できるとする。eat は他動詞であるから「主題」を目的語に取るが、この目的語は表されないこともあり得る (Let's eat, drink and merry.)。これに対して主題項は devour には必須である。tree-devouring の場合は、目的語が投射されない場合、tree は場所として解釈され「木の上で食べる (習慣)」のような意味になる。そしてそれが投射されると tree-devouring と同様に「木を食べる (習慣)」という意味になる。このように、このタイプは表現形式と意味とがかなり密接に対応しており、その意味で透明な関係が表されているケースと言える。

[B] 第2要素の基体となる動詞が前置詞を要求する自動詞である場合。

law-abiding (<X *abode* by the law), child-caring (<X *cared* for the child), discrimination-approving (<X *approve* of the discrimination; e.g. ... who argues for the expansion of these *discrimination-approving* parts of the Dormant Commerce Clause doctrine to other fields as well. (books.google.co.jp/books?isbn=1571053565)), property-investing (<X *invested* in the property; e.g. an approach to *property investing* that recognizes environmental and social considerations (www.unepfi.org/work\_streams/property/rpi/))

このタイプは「前置詞付き動詞」(prepositional verb)由来の現在分詞形であるが、筆者が知る限りでは生産性は高くない。例えば、They are *calling* for a paper が可能だからと言って paper-calling department が可能であるわけではなく、automatic light-switching system が可能だからと言って、この表現が switch off the light にも対応しているわけではない。

これまでの研究によると、law-abiding における law は abide に関して副詞の働きをしており、第1要素が第2要素に対して付加詞の働きをする ocean-going などと同じカテゴリーに属するものとされた (Quirk et al. (1985) と Biber et al. (1999) 参照)。理由は、いずれも abide by the law, go across the ocean に対応し、複合形容詞の第1要素が前置詞の目的語に対応するところにある。この2つのケースは直感的に考えても同じものではなく、前者はいわゆる「再分析動詞」(reanalysis verb) であり、結果として [abide by] が一つの他動詞のように振る舞うのに対して、後者は across the ocean は go に対する付加詞と見るのが最も自然であるように思われる。

また、次は複合的前置詞付き動詞 (complex prepositional verb) の場合である。

a *theft-preventing* device (<X *prevented* someone from theft), jewelry-robbing (<X *robbed* someone of the jewelry; e.g. Williams pleads guilty in *jewelry robbing* case), weather-protecting (<X *protected* someone from the weather; e.g. Luckily I was able to use the locks by removing the red "weather protecting" ring) しかしこの場合も、生産性もそれほど高くなく、land-depriving company (<X *deprived* someone from the land), donation-thanking note (<X *thanked* someone for the donation), deadline-reminding letter (<X *reminded* someone of the deadline) は不可能か、あるいはあまり慣用的な形式とは言えないようである。この辺りについてはあまりよく分かっていないように思える。

[C] 第1要素が第2要素の選択特性に関わらない場合。

church-going [to], ocean-going [across], fist-fighting [with], home-coming/-cooking/-schooling

## 1.2 第2要素が過去分詞の場合

過去分詞形成過程において、直接目的語が吸収されるので、過去分詞形容詞の内部にそれが表示されることはなく、基体となる動詞とそれに続く前置詞の間の関係は複雑であるように見える。少なくとも次の2種類がある。

[A] 前置詞が過去分詞形容詞の選択特性に関与する場合。例えば、family-oriented (program) の場合、family と oriented の間に前置詞 *to* が介在しているようである (oriented to family)。以下、類例を挙げるが、[ ] で関連する前置詞が示されている。

fuel-injected [by], germ-ridden [by], God-given [by], handmade [by], hate-filled [with], health-related [to], horse-drawn [by], king-sized [with regard to], language-retarded [with regard to], moth-eaten [by], pan-fried [in], poverty-stricken [by], state-run [by], stroke-induced [by], suntanned [by], typewritten [with], thunder-struck [by], weather-beaten [by], US-oriented [to/toward], wheelchair-bound [to], world-renowned [throughout]

このカテゴリーにおいて第1要素は特定の前置詞の存在を介して第2要素と関係付けられる。この中には受動の *by* 句が介在するものが多くある: church-owned (owned by the church), suntanned (tanned by the sun),

thunder-struck (struck by the thunder), weather-beaten (beaten by the weather)。上記の第2要素の基体動詞は「特定の主語 \_\_ ある種の目的語」のフレームに生じる動詞であり、主語が過去分詞形成に当って by 句に関連付けられる。したがって、表面には現れないが、どのみち語彙記載項の中で記載されていなければならない前置詞を手掛かりにして、church-owned land の場合は church が own の基底主語であり、land がその目的語に当るという解釈が可能になるわけである。

このクラスの形容詞には前置詞 by が関与するものが多いが、第2要素の基体となる動詞と by で結び付けられる第1要素との意味関係は必ずしも明白であるわけではない。例えば、(珍しいケースだと思われるが) a chauffeur-driven car は a car that is driven by a chauffeur に対応し、明らかに chauffeur は動作主であり、典型的な他動詞構文が背景にあるように感じられる。しかし、the suntanned skin の場合は、the skin that is tanned by the sun というよりも、正確には the skin that is tanned by the exposure to the sun と解釈すべきである。また、(i) a custom-built house の対応関係も面白い。これは (ii-a) a house that was built by the custom の意味というよりも、(ii-b) a house that was built to a particular customer's order の意味になる。つまり、(iia) という後位修飾構造から前位修飾構造に対応させることはできないが、一方で (iib) からはそれが可能であるということになる。つまり、後位修飾構造の意味は明確であるのに対して、前位修飾構造の意味は不明確であるということになる。この点に関しては、第6節で立ち戻って考察する。

[B] 前置詞が過去分詞形容詞の選択特性に関与しない場合。

home-made/-bound/-bred/-brewed/-cooked/-grown  
この場合、home-made butter: butter that is made at home の関係があるが、make と at home の間には直接的な関係はない。

### 1.3 第2要素が形容詞の場合

英語の形容詞は目的語を取ることができないという一般的特性があるので、第1要素の名詞が第2要素の形容詞に対して何らかの関係は第2要素と関連する前置詞を介するしか方法がない。その点では上記の過去分詞形の場合と同様である(以下の例では考えられる前置詞が [ ] で示してある)。

[A] 前置詞が過去分詞形容詞の選択特性に関与する場合。

battle/war-weary [of], blood-thirsty [for], camera-conscious [of], care/duty/grease/subsidy/smoke/tax-free [from], carsick [in], dust/fire/foolproof [against], homesick [for], iron/mineral-rich [in], life-long [for], sex-specific [to], language-particular [to], theory-dependent [on], theory-independent [of/from], theory-neutral [with respect to]

ここに挙げた前置詞は、battle-weary vs. weary of the battle のように前置詞句を形容詞の後位修飾構造にした表現形式において、第1要素の形容詞の直接的な補部を導くことができるが、場合によれば、何かを補って対応関係を考えなければならないこともある。例えば、大石(1985:101)が指摘するように、fire-proof は proof against the damage from fire となる。前節で見たのと同じように、第1要素と第2要素との間の関係は、一意的には決められず、(恐らく)語用論的な考慮に基づいて捉えられているのではないかと思われる。

[B] 前置詞が過去分詞形容詞の選択特性に関与しない場合。

ankle/shoe/knee/hip/waist/belly-deep (deep は身体部分を表す名詞を伴って深さの程度を表す)、rim/spoke/hub/flat/wagon-deep (deep は車の部分を表す名詞を伴って車が沈む程度を表す)。ash-blonde, bottle/grass/sea-green, brick-red, jet black, midnight-blue (第1要素の名詞が色彩を説明するための比較の基準をなす)、age-old (age が老齢の基準を表す)<sup>3)</sup>

## 2. 名詞編入複合形容詞名の派生過程

前節で見たように複合形容詞における第1要素は第2要素の選択特性と関係するものと、両者には直接関係がなく第1要素が付加詞的な役割を果たすものがある。本節においては複合形容詞の形式的特徴を検討し、その派生の方法について考えてみたい。

### 2.1 併合と投射—語彙レベルと統語レベル

前節で見た関係を図式的に捉えると概略次のようになるだろう。

- (1) 第1要素      第2要素
- $$N \quad - \quad \left\{ \begin{array}{l} V [A -ing] \\ V [A -en] \\ A \end{array} \right\}$$

この場合、第2要素の範疇は最終的に形容詞 A である。現在分詞の基体の V が他動詞以外の場合、第1要素の名詞 N との関係は前置詞を介して行われるが、これは英語には「他動詞的形容詞」が存在しないという理由による。

まず、第2要素が現在分詞形の場合、eye-catching のように基となる動詞が他動詞の場合、動詞の選択特性をそのまま引き継いでいるのだが、この関係を文法の中でどのように位置付けることができるであろうか。(1) の図式からも明らかであるように、複合形容詞は2つの語彙範疇が併合 (merge) (あるいは連結 (concatenate)) された結果の産物である。

ここで、eye-catching (sight) が派生される過程を考えてみよう。この場合、第2要素 catching は catch という動詞語根と現在分詞語尾 -ing が組み合わせられているが、前者は他動詞であるから、その選択特性として [+Theme] を持つと考える。したがって、派生の第一段階において [+V, +\_\_ Theme] という内在特性を持つ catch が導入され、そして、それに続いて catch の特性を満たすべく語彙範疇 N の eye が catch と併合される。その段階における構造は次のようなものと考えられる。

- (2)
- $$\begin{array}{c} \diagup \quad \diagdown \\ V \quad N \\ | \quad | \\ \text{catch} \quad \text{eye} \end{array}$$

この構造が次の操作に参入するためには、V、N のいずれかが投射しなければならないが、仮にいずれかが投射したとしても、V は N を、N は V を c 統御する (すなわち対称的に c 統御し合う) ことになる。したがってこの構造はこのままでは、語順が確定できない。Kayne (1994) の「反対称性理論」(theory of antisymmetry) によれば、非対称的 c 統御が成立する場合に、c 統御するものが先に発音される位置を占めることになる (線の語順対応公理 (Linear Correspondence Axiom: LCA))<sup>9)</sup>。したがって、(2) のままの構造では破綻するしか他に手はないということになる。

## 2.2 動的反対称性理論

本稿においては、Moro (2000) で提案されているアイデアを語形成レベルに援用することによって興味深い説明が可能であることを指摘したい。Moro は、Kayne の普遍原理はあまりにも厳し過ぎるという理由から、派生のある段階では相互 c 統御する構造も許容されるとする「動的反対称性理論」(theory of dynamic antisymmetry) を提唱している。この理論によれば、Kayne 理論であれば許されない (2) の構造であっても派生の段階で生じることができ (否むしろ生じなければならず)、反対称性を守る必要性のために、この構造に対して一方がもう一方を非対称的に c 統御するような操作 (すなわち移動操作) が加えられ、その結果適格な語順が保証される。この移動は本来は存在すべきでない相互 c 統御構造つまり左右対称構造を打ち破る移動という意味で symmetry breaking な移動操作とされている。従来移動は特殊な素性の充足のために引き起こされる「最後の手段」(last resort) とされて来たが、Moro の理論によれば、この移動は、最後の手段ではあっても、構成素構造を救済するために生じる移動であると位置付けられている点で興味深い提案である。すなわち、「移動は非対称性を求めて駆動される」と述べられた原理に基づくものとされる。

この仮説は、従来「素性駆動」(feature driven) とされた移動の動機付けに対して、対称的構造を意図的に作り出し、それを解消するための様々な仮定を設けなければならない等々幾つかの問題点を抱えていることは否定できない。一般的に統語操作において同じランクのものが併合されることは想像することが難しいように思われる。すでに見たように普通  $\alpha$ ,  $\beta$  が併合されると必ず一方が投射して全体の範疇のラベルを決定する。例えば [D the] と [NP ball] とが組み合わせさって [DP the ball] が出来上がり、kick と the ball が組み合わせさって [VP kick [DP the ball]] が出来上がる。つまり、語彙範疇の主要部と区範疇とが併合して、主要部が投射するわけである。Moro は小節 (Small Clause) が対称的構造を成すと言う。例えば, I found [the room empty] の場合、DP the room と AP empty とは何も介在するものではなく、単に「sc DP AP」が並列するという構造を仮定している。しかし、小節構造が Moro が想定した対称的構造をなしておらず、例えば抽象的な機能主要部を想定することも十分可能である。Moro (2000) の提案には、小節構造に対する対称的構造自体に対する動機付けの議論が乏しく、また、内心構造ではどこが不都合であるかの議論もない。動

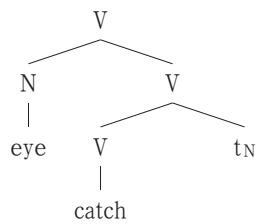
的反対称性を想定しなくても、Kayne (1994) の反対称性理論を想定すれば、2つの最大範疇が並列された小節「sc DP AP」が派生に導入されたとしても、これは自動的に排除されるので、小節構造としてはAPを補部とする語彙範疇が存在しなければならないことになる。この点から見て、田子内 (2002) が指摘するように、Moro 仮説が統語的に有効であるかどうか疑問が残ることは事実である。

しかし、統語的な仮定として対称的構造を設けることは不自然であったとしても、語形成の過程において(2)のように同一レベルの語を並列に置くことは十分にあり得ると思われる。以下、対称的構造が語形成の第1段階において許容され、統語論の場合と同じく、反対称性理論の働きによってしかるべくその構造が修正されることで、望まれる語順が得られることを指摘したい<sup>5, 6)</sup>。

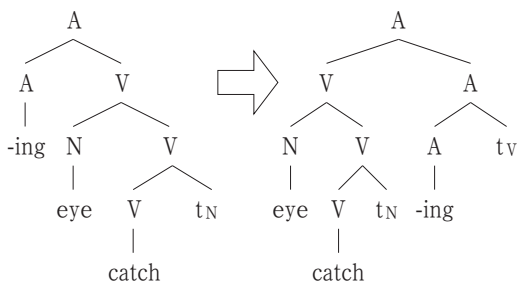
2.3 統語論以前と統語論内のレベルの併合

ここで(2)の構造に立ち戻ってみよう。ここでは統語論以前の段階において語彙範疇のV catchとN eyeは相互にc統御し合っている構造になるので、これを避けなければLCAの違反を招くことになる。先ず、(2)において「目的語」であるeyeが適切な場所に移動し、catchだけでなく、自らの痕跡をc統御する位置を占めるようにすることである。この場合、全体の範疇ラベルはVが決定する。この場合の派生は次のようになる。

(3) a. [V N (eye) [V V (catch) t<sub>N</sub>]] (主要部移動：名詞編入)



b. [A [A -ing (+A)] [V N (eye) [V V (catch) t<sub>N</sub>]] (現在分詞形成)



(3a) では(2)における「目的語」の主要部NがVの中間投射Vに付加することによって新しいVの投射が作られる。この付加操作は主要部移動であり、結果として名詞Nを編入(Noun Incorporation)することになる。(3a)という語彙範疇に更に現在分詞形成規則によって形容詞の範疇ラベル(A)を持つ-ingが加えられる。この場合、A -ingはVの投射を補部とし、かつc統御する位置にあり、同時にVもA -ingをc統御することから、AとVとは相互的c統御関係にある。これに何も起こらなければ、この構造はLCA違反をきたすことになる。したがって、(3a)の場合と同じように、望ましくないこの対称性を解消するために、VをAに付加しなければならない。この派生の結果を示したものが(3b)の右側の構造である。また、この付加操作によって接辞-ingとそのホストとなるべきV catchとの隣接性も同時に担保される。

この分析では、catchingの基体catchが他動詞であり、その目的語としてある一定の意味の側面を持ったものを要求するという情報(選択特性)がcatchの語彙記載項に書き込まれているのであるから、eyeがcatchに関する主題(Theme)であるという情報が複合形容詞においてもそのまま継承されることになる。この場合、catchが語彙特性として持っているはずの目的格を付与するという特性は発動されることはない。なぜなら、catchの「目的語」はNという語彙レベルなのであるから、格を表示される資格がないからである。恐らくは、受動態において、過去分詞形成の際に動詞の格付与能力が吸収されるのと同様の原理が働いているのかも知れない。ここで注意しなければいけないのは、複合形容詞形成に関する上記のプロセスはあくまで統語論に入る前段階の形態論において生じるという点である。

(2)をもとにして考えられるもう1つは併合が統語論でなされるという可能性である。つまり、数え挙げ(Numeration)で与えられたV catchとN eyeとが併合したと考えられる。もちろん、この構造は何の手も加えられなければ対称的構造に至るので、V、Nいずれも投射しない不都合な構造である。しかし、統語論においては語彙範疇はより大きな句範疇へ投射することができる(これに対して前段で見た形態論においてはあくまで語彙レベルでの操作であるから語彙範疇を越えることはあり得ない)。したがって、(2)が統語論で生じたら、即刻VまたはNが最大投射を形成することが可能である。この場合、Chomsky (2012)に従っていずれが投射しても構わない。Vが投射し全体

の範疇ラベルを決定し、Nが最大範疇を形成すればVを主要部とし、Nの最大範疇を補部とする通常のVP構造（例えば (Advertisements that) caught my eyes）が得られる。このように、統語論レベルにおいては、catch, eyeはそれぞれ最大範疇として解釈可能な形式的（動詞であれば時制などの、名詞であれば数の表示などの）特徴を備えなければならない。しかし、反対にもしNが投射して全体の範疇ラベルと決めた場合 [NP [VP catch] [N eye]] の形式が得られるが、（仮に動詞に現在分詞接辞 -ing が与えられても）この形式は英語として解釈され得ず派生が破綻するか、全く意味をなさない (gibberish) ものとして排除されることになる。

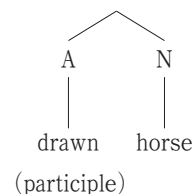
以上の議論をまとめると次のようになる。語彙範疇が併合された (2) が与えられた場合、このままであればVとNが相互にc統御することになり、Kayneの線の語順対応公理(LCA)に反するが故に破棄されることになる。しかし、形態論、統語論においてこれを救済する手立てがある。形態論においては、Nが内的併合（つまり移動操作）を受けて、複合形容詞を形成する。形態論という語形成レベルにおいて可能なアウトプットはNの移動しかなく、それが施されなかった構造はこの段階で破棄されることになる。一方、統語論においては形態論にはない可能性がある。それは語彙範疇が句レベルへ投射するという性質である。統語構造においては特別な環境においてしか語彙範疇がそのままの形で存在し得ない。したがって、語彙範疇V, Nが統語論に導入されるや否や句範疇へと投射しなければならず、結果として主要部と補部の関係が生じることになる。したがって、eye-catching (advertisements) は形態論で形成された形容詞であり、(advertisements that) caught my eyes は統語論で作られた動詞句ということになる。

本稿で示した提案の理論的な利点は、英語は統語構造においては主要部先頭型でありながら、語形成のレベルにおいては主要部末尾型になるという、一見したところ矛盾した特性を持つことを何も余分な仮定を設けることなく説明できるという点である。この事実は初期の頃から注目されてきたが、本稿で名詞編入複合形容詞と呼ぶ形容詞に注目して、Emonds (2000: 76-83) は「主要部は末尾である」という普遍的な原理を設け、一方特定言語固有の特性によってこの原理を実行しないことも生じると仮定する。例えば、英語では語レベルにおいては普遍原理に従った主要部末尾の語順を見せるが、統語論においては、主要部—補部とい

う英語固有の語順上の特性がために上記の普遍原理が実行されず主要部が先頭に生じる語順になる。これに対して、本稿の方法によれば、同じ語彙レベルの2つの項目を併合することにより生じる不都合（相互c統御関係が成立し、語順を決められないという事態）を解消するために最後の手段として一方が他方より高い位置に移動し、その結果として英語では語レベルにおいて主要部が末尾に生じる結果に至る。つまり、特段の余分な仮定をもうけることなく、最後の手段としての移動操作によって名詞編入複合形容詞を説明することができると同時に統語論においては（主要部が投射するという一般的性質に則って）主要部—前置詞補部という語順になることがごく当然のこととして説明できる。

### 3. 第2要素が過去分詞・形容詞

第2要素が他動詞の現在分詞形である場合と異なって、第2要素が過去分詞・形容詞である場合、第1要素の名詞第2要素との間の関係は前置詞によって関連付けられる。つまり、基体となる動詞の（あるいは過去分詞が形容詞として語彙化している場合は過去分詞形容詞の）語彙情報として前置詞が個別的に記載されているものと考えられる。例えば、horse-drawn という複合形容詞において、drawnの基体は他動詞であり、それが受動態過去分詞となって、形容詞的働きをする。過去分詞 drawn は、非常に大まかに述べるならば X draw Y → Y drawn (by X) という形式と関連付けられていなければならない。つまり、過去分詞には、「引く行為者」に関する情報、「引かれる対象物」に関する情報が何らかの形で記載されていなければならない。そして、複合形容詞形成に関する数え上げとして {drawn, horse} が与えられると、上記の (2) と同じように両者が併合されて次の構造になる。



複合形容詞の派生は上記の場合と同様で、VとNという語彙範疇が相互c統御するこの構造のままでは、語順が決定できないが故に、horseが移動することになる。

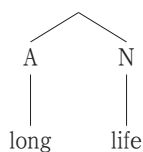
また、この複合形容詞の被修飾名詞はdrawに対し

て, the horse-drawn carriage/cabs/streetcar/omnibus のように, 受動態の主語(基底の目的語)の働きをするものがほとんどである。つまり, この場合 The carriage was drawn by a horse ← A horse drew the carriage の関係が成立する。このことから複合形容詞の第2要素が過去分詞である場合, 過去分詞は, 例えば drawn であれば, “Some form of carriage is drawn \_\_ by some animal” というような情報を内在しており, それが a horse-drawn carriage の解釈に寄与する。しかし, 被修飾名詞との関係はやや微妙なケースも出て来る。例えば, the horse-drawn trip/journey の場合は, The trip/journey was made by the use of horse-drawn carriages のような関係が生じているように見える。この場合は horse-drawn と trip/journey の関係が付加詞的と考えられるが, このように, 過去分詞内の関係と被修飾名詞との関係は, 用いられた名詞と動詞の間に「推測し得る関係」が成立しさえすればいいように思われる(この点については第6節で再び立ち戻る)。

次に第2要素が形容詞の場合であるが, 内部構造上は, 第1要素が暗黙に了解される前置詞の存在を介して第2要素と関連付けられる点において, 過去分詞の場合と同様である。例えば, blood-thirsty の場合, 第2要素たる thirsty は内在的に補部として for で導かれる前置詞句を取るように指定されている形容詞である(thirsty for blood)。

ここで long と life という語彙項目を例に取って, 語レベルと文レベルの派生について考えてみよう。語レベルの場合, すなわち複合形容詞は上記と同様に同じ統語範疇の A と N が並列的に併合される。

(5)



すでに見た通り, この構造は A と N が相互に c 統御する対称的構造である。これを回避するために一方が一方を c 統御しなければならず, 結果的に life が上位に繰り上がることによって life-long のような複合形容詞が生じることになる。しかし, 過去分詞を基にする複合形容詞と違って, 統語派生の過程において, N の方が投射する可能性がある。上記の (5) のように最大投射へ投射しない語彙範疇が統語構造において存在することはできないので, A も N も投射しなければならない。そこで結果的に前位修飾形容詞句を持つ名詞句 (long life) が生じることになる<sup>7)</sup>。

#### 4. 第1要素と第2要素との間に選択関係がない場合の派生

これは例えば, ocean-going のように第2要素が現在分詞, home-made のように第2要素が過去分詞, ankle-deep のように形容詞である場合があり得る。それぞれ, go to the ocean, make (something) at home, deep up to the ankle のように前置詞を介して第1要素と第2要素が関係付けられている。しかし, このケースが第3節で見た horse-drawn や species-specific の場合と違っては, この場合, 前置詞が基体となる動詞の厳密下位範疇化とは直接関わらないように見えることである。例えば, ocean-going において, ocean は go に対する方向を表しているが, 方向を表す表現は go にとって必須要素とは言えず, どちらかと言えば付加詞的な存在に思われる。これは上に挙げた例にも当てはまる。

このことから, 上記の場合, 第1要素は解釈上第2要素の意味内容と矛盾しない限り成立すると言うことができるかも知れない。例えば ocean-going を例にとると, go は方向 (direction) を表す表現が必須要素であるとは言えないが, 方向と矛盾せず, かつ ocean がたまたま方向になり得る名詞であるから成立するように思われる。したがって, ocean-applying のように場所または方向と何の関係もない apply を基体とする形容詞はあり得ないだろうし, aristocracy-going のように移動や方向と無関係の aristocracy が第1要素になることはできない。したがって, 全体的には, 日本語の関係節同様に「関連性」(aboutness) が保たれれば成立すると考えられる(第6節参照)。例えば, ocean-going boat (ship, steamer, boat, liner, tug, tanker, vessel) などのように, ocean-going は going の「主語」を修飾するのが普通だが, 次のように, 船が航行する際の様式を修飾することもある。

(6) The Waterasons sing *an ocean going shanty* in *an ocean going way*, roughly with plenty of guts.

この場合, going に対して ocean は「航行する場所」, way は「外洋航行の方式」を表すという関係が生じる。

#### 5. 第1要素としての名詞の特徴

第3節で見た通り, 第1要素としての名詞は, 対称性を打破する必要性のために繰り上げられ, 第2要素に付加されたものと考えた。この移動は, あくまでも

形態論のレベルで生じるものだから、主要部移動の一種である。つまり、範疇ラベルはNであって、決してNPあるいはDPという最大投射ではない。このことは、統語レベルで最大範疇に適用される原理原則はこの編入されたN投射には無関係であるということの意味するが、事実はその通りになっている。その1つの証拠として、例えばeye-catchingのように第1要素の名詞が第2要素の「目的語」の関係にある場合、通常の名詞句であれば目的格が付与されなければならないが、複合形容詞に生じる名詞には格が与えられないという事実が挙げられる。これは、すでに述べたように、格は名詞句（あるいは限定詞句（DP））の認可条件として働き、語彙レベルの名詞Nの認可するのではないということを反映している。

次に、束縛原理Cに関して考えてみよう。束縛原理C（Binding Condition C）は「R表現は自由である」（Chomsky（1982））と定義される。R表現とは、指示対象を持つもの（例えばJohn, carなどの名詞表現）のことであり、束縛条件Cは同一指標を持つ指示対象によって束縛され（つまりc統御され）てはならないということを述べたものである。もし、R表現が最大投射に限定されるならば、NP/DPは束縛条件の適用は受けるが、Nレベルの範疇はその限りでないということになる。

(7) My *dog* died, after suffering from a *dog*-specific disease.

この文章が決して非文法的でないということは、主語のdogとfromの目的語の一部をなすdogとは同一の文法的資格を持っていないということの意味する。

(7)において後者のdogは何も具体的な犬を表すものではないのに対して、前者のdogは存在を前提とする現実の犬を指し示すものである。このことは、複合形容詞dog-specificにおける第1要素のdogが最大投射でなく語彙範疇レベルとする本稿の見解を指示する証拠である<sup>8)</sup>。

また、複合形容詞の第1要素が名詞である場合、それは何ら現実世界の指示対象を表すものでないということは、複合名詞における解釈によっても支持される。例えば、Giorgi and Longobardi (1991: 131) は、Edwin Williamsの判断として、次のような観察をしている。

(8) a. John is a *Nixon hater*, but he does not hate Nixon.

b. John is a *hater of Nixon*, but he does not hate Nixon.

(8a) においてはNixonは複合名詞の第1要素となっ

ており、(8b) ではNixonはhaterの内項となっている。複合名詞の第1要素としてのNixonは指示表現としての意味を持たないが故にその存在が前提となっておらず、現実のNixonが嫌いであることを表すbut以降の陳述と矛盾をきたさない。これに対して(8b)においては、Nixonはhateの内項であるからその存在が前提となる指示表現である。したがって、but以降の陳述は完全に矛盾をきたすことになる。複合名詞で生じていることは、複合形容詞においても同様であると言うことができる。

また、この分析によれば複合形容詞の第1要素は投射しないNなのであるから、複合形容詞の内部に最大投射の性格を持つ要素は生じ得ないことを予測する。例えば、a classical theory-dependent argumentという連鎖があった場合、原理的に、classicalがtheoryを修飾する「古典的な理論」という解釈と、classicalがargumentを修飾する「理論依存的古典的議論」という解釈があり得るが、事実は後者の可能性しかない。つまり、同じNP内に形容詞が生じた時、それが複合形容詞の第1要素を修飾するということは不可能である。更に、このことは、不定冠詞aは名詞句の中心名詞argumentにかかる不定冠詞であるということを示している。この帰結として、a furniture-minded publicのような形式が可能になる。つまり、普通furnitureと不定冠詞は共起できない(\*a furniture)が、この連鎖が可能であるということは、不定冠詞は名詞句の中心名詞としか関連を持たないということ物語っている。この事実は、まさしく、本稿の分析が正しく予測するところである。

また、the classical theory's independent argumentという表現があった場合、classicalは決してargumentを修飾せず、また、theはargumentの限定詞でないことは、英語の属格表現の特性から考えて自然な解釈である。英語の属格表現において冠詞が生じた時、それは名詞句の主要部名詞を定化する働きがない（例えばthe boy's friendという場合、「少年のその友達」という解釈は存在せず、「その少年の友達」としかならず、friendを定化するのには所有の属格である）。したがって、上記の例は[the classical theory's] [independent] [argument] としか解釈できない。この点で、複合形容詞の第1要素になる名詞は属格とは全く異なった性質を持つわけである。

しかし、今見た属格表現はBiber et al. (1999: 294-295) が「指定属格」(specifying genitive) と呼んだものであって、そこで「分類属格」(classifying genitive)



はかなり複合形容詞の第1要素になる名詞と類似した働きを見せるように思われる。分類属格は、a bird's nestに見られるように、中心名詞 nest を種類分けする働きがある。His hair felt like a bird's nest. と言った人に対して “What kind of nest?” と聞き返すことができる。これに対して通常の指定属格 I found the blackbird's nest. に対しては “What kind of nest?” とは問えない。Biber 達はこの事実をもって、分類属格が定冠詞というよりも、形容詞的に振る舞う「名詞の修飾語」（本稿で言う複合形容詞の第1要素になる名詞）との類似性を指摘している。更に、指定属格の場合、属格形に先立つ冠詞は属格形名詞を修飾したが、分類属格の場合の冠詞は全体の名詞句の主要名詞を修飾する。例えば、a bird's nest は a [bird's] nest と解釈される。したがって、new children's clothes のように無冠詞の場合、名詞句は不定名詞句である。また、「分類属格＋名詞」という連鎖を形容詞修飾によって分割することができない。例えば、\*a bird's new net, \*children's new clothes の連鎖は許容されない。このことは、複合形容詞 a camera-conscious (person) において \*a camera-very-conscious とは言えず、a very camera-conscious しか許されないことと平行である<sup>9)</sup>。

現段階では、指定属格と分類属格の違いをどのように明示的に示すか不明である。しかし、Biber et al. (1999) の記述から明白なことは、分類属格形は複合形容詞の第1要素になる名詞と非常によく似ているということである。残念ながら、この問題は未解決のものとして残さなければならない。

## 6. 英語の名詞編入複合形容詞と日本語の関係節

ここで、英語における前位用法の複合形容詞と主要部末尾型の日本語の関係節との興味深い類似点について考察してみたい。われわれは、本稿で取り扱った名詞編入複合形容詞名は本来形容詞あるいはその基体となる動詞に関連する要素が編入を経てきたと主張してきた。(3a, b) で見た編入操作による派生によって少なくとも表面上は本来英語の基本語順である「動詞—目的語」が変更されて、英語のパラメータに合致しない「目的語—動詞」という線的順序に変更されているように思える。Kayne (1994) は、全ての言語は基底構造において普遍的に「主要部—補部」という語順をもつと提案した。この提案によれば、表面上主要

部が末尾に生じる日本語においては、VP 内は「動詞—目的語」の語順であったものが、目的語を Spec, VP 位置に移動させ、結果として表層語順が導かれるということになる。本稿の主張は、まさしく同じことが英語の語形成という語彙レベルにおいて起こっていると主張したことになる。つまり、英語の複合形容詞は主要部末尾言語のパターンをもっている言語形式であるということになる (Emonds (2000) 参照)。

ここで、日本語における関係節を考えてみよう。日本語の関係節の特徴は、英語などと違って先行詞と関係節の関係が曖昧であるという点である。例えば、「その町に住んでいる学生」(a student who lives in the town), 「私が買った辞書」(a dictionary that I bought) などのように主語や目的語が関係節で連結されている場合は英語と同様であるが、前置詞の目的語が関係節化された場合日本語は特異な現象を見せる。たとえば、「私が床を掃いたほうき」は「私が床をほうきで掃いた」を基にして、具格 (instrumental) を表す「ほうき」を関係詞化している。日本語の関係節においては、具格を表す後置詞「で」を明示的に表現することはない。このように後置詞を表現せずに前位修飾の働きが可能である点は、英語の次のものを第2要素とする名詞編入複合形容詞名と同様の原理が働いているように思われる。

- (A-1) a. 過去分詞：horse-drawn, hate-filled, language-retarded  
 b. 形容詞：battle-weary, duty-free, fire-proof, mineral-rich
- (A-2) a. 現在分詞：church-going, fist-fighting, home-schooling  
 b. 過去分詞：home-made, home-grown  
 c. 形容詞：waist-deep, spoke-deep, midnight-blue

(A-1) においては第2要素の基体動詞あるいは形容詞と何らかの点で密接に関係している前置詞を介して第1要素と関係付けられると思われるのに対して、(A-2) においてはすでに第4節で観察したように第1要素と第2要素を関連づけている前置詞が第2要素にとってあまり密接な関係があるとは思えない。しかし、この表現形式を後位修飾に換えると特定の前置詞が生じなければならない (a carriage that is drawn by a horse, people who are weary of the battle, people who goes to church, cake that is made at home, the river that is deep up to the waist)。

英語において最も多用される構造は後位修飾であり、

日本語においては前位修飾構造のみが選択肢である。このことを考えると、日本語の関係節と英語の名詞編入複合形容詞名は前位修飾構造であるが故に後置詞／前置詞を表すことができず、日本語における関係節と先行詞の関係性、英語における第1要素と第2要素の関係性は文脈的に決定されると言うことができるように思われる。それでは、その文脈をどのように捉えるべきであろうか。その鍵は日本語の関係節の認可の仕方にあると思われる。

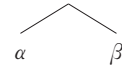
例えば「太郎が逃げた窓」と言えば「窓」は太郎の脱出口、すなわち源 (source) と解釈で、the window from which Taro ran away に一致するだろう。また「太郎が逃げた実験室」の場合、the laboratory to which Taro went running の解釈することができるだろう。つまり、日本語では関係節「太郎が逃げた」と先行詞「窓」の間、あるいはそれと「実験室」との間にどのような論理関係が成立し得るかどうかでその容認性が決まるように思われる。例えば、「太郎が逃げた」の先行詞を「木星」などとすれば、両者の間に適切な論理関係が捉え難いと思う多くの人には不自然な関係節となるし、それを見いだすことができると考える人にはあり得る関係節であろう。

Kuno (1973) は日本語の関係節化は話題化とが密接に関連しており、話題化が可能であれば関係節化が可能であると指摘した。話題化文は典型的に、話題として取り上げた要素と、それに対する論評とから成る形式である。つまり、話題化文において、話題を除いた部分は話題に体するコメントになっている。もし、話題化と関係節化が同じカテゴリーのものであるとするならば、関係節は、先行詞について述べたコメントである。このような特徴を考慮して、Saito (1987) は日本語における関係節の認可条件として「関連性」(aboutness) を提案した。つまり、関係節とその先行詞の間には関係節が先行詞のことについて何か述べていなければならないということになる。つまり、その関連性が成り立つ限りにおいて、日本語の関係節は成立するのである。

もし、英語の名詞編入複合形容詞名と日本語の関係節化が、前位修飾という構造的特徴を共有するという点に基づいて、同じ「関連性」が作用していると考えたとすれば、英語の名詞編入複合形容詞名については、第2要素の内容と第1要素の内容とが「主要部—補部」の関係にあるものが最も関連性が高く、第2要素と関連するはずの前置詞が第1要素との関連性が薄くなれば不自然さを来すと予測することになる。

## 7. 残された問題

本稿における中心的な主張は、複合語形成に当って、併合される要素は語彙範疇であるということである。つまり、



この形式は統語論においても形態論においても同一形式であるが、形態論における語形成に関して言うと、 $\alpha$  も  $\beta$  も語彙範疇であり、その点で両者の投射レベルは同じである。つまり、両者ともそれ以上に拡張することはない。したがって、nerve-wracking の場合、nerve ( $\beta$ ) が wrack ( $\alpha$ ) に付加し、結果 wrack の投射が生じ、その範疇記号は V である。この V と形容詞的現在分詞接辞 -ing とが併合して最終的には再び A という語彙範疇が投射するわけである。これまで、この一連のプロセスを仮定することによって、正しく捉えられる側面を指摘して来たが、一方で、問題点もある。

第1に、複合形容詞において第1要素が時々語彙範疇ではない特徴を示すことがある。前節で述べたように、a nerve-wracking experience があつた場合に nerve は語彙範疇であるから、不定冠詞と結びついてより大きな範疇を作ることはあり得ないという事実は正しく捉えることができる。というのはもし [a nerve]-[wracking] experience という分析であれば、a nerve が1つの N より大きな範疇を作ることになるからである。また、この分析では、第1要素は単数形であるはずで、事実大多数は予測通りに単数形であるが、painstaking という例外が存在することはよく知られている。

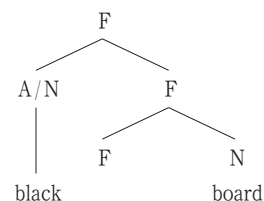
仮にこの語は例外としても、もし、複合語形成の一般的な形式が上記のような構造であつたとすれば、事態はもっと深刻になりそうである。この点については形態論における研究で明らかにされているが、例えば、Quirk et al. (1985: 1334ff.) には、parks department, courses committee, examinations board, あるいは、customs officer, a goods train などが指摘されている。また、customs officer と custom officer との意味の違いもある。更に、under-the-weather feeling, round-the-clock service など明らかに最大投射と見られるものが第1要素に生じることもある。本稿では、複合形容詞をもっぱら中心として来たが、複合語全般となると更

に手に負えない現象があるようである。

\* 本稿は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究(C)（一般）課題番号23520601，研究課題「統語論と形態論のインターフェイスの研究—NA 形容詞句」）の補助を受けている。

#### 注

- 1) 名詞編入複合形容詞名 species-specific における species を第1要素，specific を第2要素と呼ぶことにする。
- 2) Quirk et al. (1985: 1577) によれば，lip-sucking において lip が sucking に対する付加詞となると考えられているように思われるが，次の解説記事を見ると lip は sucking に対する目的語と考えたほうが正しいように思う。“**Lip sucking** involves repeatedly holding the lower lip beneath the upper front teeth. Sucking of the lower lip may occur by itself or in combination with thumb sucking ([http://www.medicinenet.com/oral\\_health\\_problems\\_in\\_children/page3.htm](http://www.medicinenet.com/oral_health_problems_in_children/page3.htm)).” といえながら，ネット上で公開されている Weblio では「吸唇癖」と訳されている。
- 3) 複合形容詞は多様であって，本稿の対象外にあるものとして，次のような例がある。次は第1要素—第2要素の組み合わせを示す：(i) 叙述補語—現在分詞形 (funny-looking, coarse-feeling)，(ii) 叙述補語／二次述語—過去分詞形 (clean-shaven, soft-textured)，(iii) 副詞—現在分詞 (far-reaching, everlasting)，(iv) 副詞—過去分詞 (far-fetched, well-meant)，(v) 副詞—形容詞 (critically-ill, environmentally-progressive)，(vi) 形容詞—形容詞 (auditory-visual, Russo-Chinese)。
- 4) Kayne (1994) の定義。
  - (i) c 統御 (c-command)  
A を支配する全ての範疇が B を支配し，かつ A が B を排除するならば，A は B を c 統御する (A c-commands B if every category that dominates A also dominates B, and A excludes B)。
  - (ii) 線の語順対応公理 (Lear Correspondence Axiom (LCA))  
もし非終端範疇 A がもう一つの非終端範疇 B を c 統御するならば，A によって支配された終端節点は全て B によって支配される終端節点に先行しなければならない (If a nonterminal category A c-commands another nonterminal category B, all the terminal nodes dominated by A must precede all of the terminal nodes dominated by B)。
- 5) Di Sciullo (2005) ではこのように同等のレベルのものを単純に併合するのではなく，最初から反対称性の原理に沿うように機能範疇を主要部としてその指定部と補部とを取るような構造が提案されている。たとえば，black board は次のような内心構造をもつとされる。



この場合，主要部の F は意味論的には AND, OR, SORT という内容を担うが，もちろん音声形式は一切持たない抽象的存在である。また，Siddiqi (2009) のような分離形態論 (Distributed Morphology) による研究もあるが，本稿では直接的にいずれかにコミットしてはいない。

- 6) 本稿の対象とした複合形容詞は第1要素が名詞の場合に限定しているが，ここで提案した複合形容詞形成過程は他の場合についても当てはまるように思える。ただ，興味深い事例は第1要素が第2要素に対して叙述補語 (predicate complement, predicative) の場合である。例を挙げると funny-looking, lovely-sounding, sweet-smelling, good-tasting, smooth-feeling のように第2要素の基体となる動詞の補語である場合と，clean-shaven, fresh-baked, new-laid, soft-textured, white-washed のように第2要素の基体となる動詞に対して二次述語 (secondary predicate) として働く場合とがあるようである。例えば，分かりやすい例として補語の例 funny-looking を取ると，補語を小節から導く分析には非常に難しい問題を惹起するように思える。例えば，That looks funny. は [ec] looks [that funny] という形式が基底にあって，that が主節主語に繰り上げられて，That looks [t<sub>that</sub> funny] となると考える，いわゆる小節分析を考えてみよう。もし，funny-looking が [v look]—[A funny] の併合によって導かれたとするならば，look と funny はもともと非連続的關係にあったわけで，それが語彙レベルの V と N として併合されるとき，すでに統語操作を受けたものを語形成規則に取り込むことになるが，それが可能なのだろうか？二次述語が関与するケースはもっと分析が難しい。複合形容詞を見る限りにおいては，主述関係を構造的に捉えようとする小節分析でなく，構造自体は表面構造を仮定して，それに主述規則 (predication rule) を想定する方法の方が関係を容易に捉えることができるように見える。
- 7) Chomsky (2012) では，例えば  $\alpha, \beta$  という2つの範疇が併合される場合，いずれか一方が投射して全体の範疇が決定される ( $[_{eP} \alpha, \beta]$ ,  $[_{\beta P} \alpha, \beta]$ ) ことになるが，この場合，必ず投射されるものが一意的に決まっている訳ではないと指摘されている。Chomsky が具体例として引用したのは，[D what] と [c [TP he saw]] が併合された例である。この場合，D である what が投射すれば自由関係節 ( $[_{DP} \text{What he saw}]$  was impressive) が，機能範疇 C が投射すれば間接疑問補部 (I don't know  $[_{CP} \text{what he saw}]$ ) がそれぞれ投射する可能性がある。これは統語レベルでの現象であるが，本稿の証拠は形態論レベルと統語論レベルで同じ語彙項

目を使いながら異なる投射を持ち得ることになる。

8) Kayne (1981) は次のように、指示対象を持つ形容詞 (referential adjective expressing thematic function of the head) は束縛条件 A を満たすことができないと述べる。

- (i) a. *the Albania's* destruction of itself  
 b. *Albania's* destruction of itself  
 c. \**the Albanian* destruction of itself/themselves

(ia, b) においてはそれぞれ the Albania, Albania という DP が再帰代名詞 *itself* の束縛子になるが、(1c) におけるように形容詞はその資格を失うとしている。本稿の (7) は、形が同じであっても範疇が整わなければ束縛条件を受けないということを、そして、(i) は意味的にはパラレルに見えるようでも、束縛条件適用に当って範疇の種類が問題となることを示している。

9) 分類属格としてよく用いられるのは人間を表す複数名詞が属格になることが多い (Biber et al. (1999: 295)): boys' camp, boys' clubs, a boys' school, a boys' home, girls' books, girls' coats, girls' names, girls' grammar school, a men's clothing store, men's suits, a men's team, the oldest women's club, women's club, women's clothing, women's magazines.

#### 参考文献

- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman, London.
- Chomsky, N. (2012) "Problems of Projections," *Lingua* 18, 1-35.
- Di Sciullo, A. "Decomposing Compounds," in *SKASE Journal of Theoretical Linguistics* 2/3, 14-33.
- Emonds, J. (2000) *Lexicon and Grammar: The English Syntacticon*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Giorgi, A. and G. Longobardi (1991) *The Syntax of Noun Phrase: Configuration, Parameters and Empty Categories*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kayne, R. (1981) "On Certain Differences between French and English," *Linguistic Inquiry* 12, 349-371.
- Kayne, R. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Moro, A. (2000) *Dynamic Antisymmetry*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
- Namiki, T. (並木崇康) 『語形成』大修館, 東京.
- Oishi, T. (大石強) 『形態論』開拓社, 東京.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Saito, M. (1987) Some Asymmetries in Japanese and their theoretical implications, PhD. Dissertation, MIT.
- Siddiqi, D. (2009) *Syntax Within the Word: Economy, Allomorphy, and Argument Selection in Distributed Morphology*, John Benjamins Publishing, London.
- Takonai, K. (田子内健介) (2002) 「書評: Andrea Moro, Dynamic Antisymmetry」『英文学研究』79-2, 168-173, 日本英文学会.